

# 無量壽

## 浄土真宗物語⑱

平成25年1月1日

浄土真宗 本願寺派

林徳寺 発行

025 - 276 - 3456

当時の常識でいえば、たとえ年齢の順がどうあろうとも、正妻の子が長男となります。ですから第七代目存如上人の正妻の子であった応玄様が長男で、母親が本願寺の召使いであった蓮如様は、年齢は上ですが、後継者にはなれないのが当然でした。

ところが叔父の如乗様の無理押しで、蓮如様が後継者に定まったものですから、応玄様とその母親はもしかろくありません。すぐさま本願寺に所蔵されてきた多くの宝物を持ち出して、出て行ってしまうわれました。



円光寺跡地

その際に親子で住まれたのが、現在の石川県小松市大杉町にあった円光寺であるといわれています。現在はその寺の跡地が、山の中に残されています。

当時蓮如様は四十代半ば、一方、応玄様は二十台の若さでした。また、蓮如様は既に法話の名人として知られ、多くの直接の門徒をお持ちでした。それに対して応玄様は、当時まだ京都の青蓮院で修行中で、浄土真宗の教えを、御門主として、門徒に法話する事がおできになるような状況ではありませんでした。

このような状況から、叔父の如乗様は、本願寺の将来を大きく切り開くには蓮如様を門主にするしかないと思い定め、強硬手段に出られたものと考えられます。

応玄様は後に自己の行いを悔い、本願寺に帰参しておられます。

ようやく本願寺門主となられた蓮如様は、こののちその実力をとおおいに発揮されて、本願寺の教えを全国各地に広めて行かれました。

教えを広めることを布教といいますが、

蓮如上人の布教手段の中心は、お西では「御文章」お東では「御文」と呼ぶ、お手紙です。蓮如上人は生涯に一五〇通ほどのお手紙を書かれたといわれています。これを全国の門徒に送り、機会があるごとにみんな読んで読むようにと教えられました。

漢字ばかりのお経と違って、ひらがな交じりの、当時の普通の言葉で書かれたお手紙ですから、読めばその内容がよくわかったはずで

浄土真宗の教えを広める通信教育といえるかもしれません。お手紙はその通信教育の教材です。蓮如様は、日本最初の通信教育をおはじめになったと考えると、その偉大さがわかるような気がします。

蓮如様が第八代を継がれたのは、長禄元年（一四五七年）の事です。今から五〇年以上も前のことです。林徳寺の先祖が蓮如様と出会い、そのお手伝いをするようになるのは、もう少し先の話です。

# 浄土真宗の作法・心得（シリーズ12）

## 御文章

本願寺第8代御門主の蓮如上人が浄土真宗の教えを広めるためにお書きくださったのが、「御文章」です。

同じものを大谷派（お東）では「御文」といいます。元々はお手紙ですから、「御文」がその意味合いをよく表していると思いますし、本願寺が東西に分かれる前は「御文」といつていたようですから、私たち本願寺派（お西）も、昔に戻してもよいのではないのでしょうか？

蓮如上人は、生涯で一五八通のお手紙を書いて、全国の門徒に出していただきました。

一通一通が、浄土真宗の教えをわかりやすく解説した通信教育のテキストですから、それをこれだけの数書いて下さった事は驚くべき事だと言えます。



本山での御文章拝読



御文章箱

現在は、この一五八通の中から、蓮如上人のお孫の円如様（えんにょ）が八十通を選び出し、五帖に編集してくださったものを、主にお参りや法話のあとで、拝読しています。『聖人一流の：』と言った言葉をお聞きになったことがおありだと思えます。

今後御文章拝読をお聞きになったときは、蓮如上人が五百年の時を超えて呼びかけていてくださると思いつながら、お聞きいただければと思います。

皆様のお仏壇前にある「御文章箱」中の本には、この八十通から、さらにより分けた御文章が載せられています。ぜひ一度ご覧いただきたいものです。

古くからのお宅では、ご先祖がたびたび拝読しておられたことを表す汚れが、本のページの角に付いています。

昔の方は、できる限り本を汚すまいと、ページの角だけをつまんで、丁寧にめくっておられたことがよくわかります。

日本語になった仏教の言葉

御文章でもっとも有名なものは、「白骨の御文章」です。

それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おおよそはかなきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。されば、いまだ万歳の人身をうけたりという事を聞かず。一生すぎやすし。今に至りて誰か百年の形体を保つべきや。我や先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らず、遅れ先立つ人は、元のしづく、末の露より繁しと言えり。されば、朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、即ち二つの眼たちまちに閉じ、一つの息ながく絶えぬれば、紅顔むなく衰して、桃李の装いを失いぬるときは、六親眷属あつまりて嘆き悲しめども、さらにその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の煙となし果てぬれば、ただ白骨のみぞ残れり。あわれといふも、なかなかおろかなり。されば、人間のはかなき事は、老少不定のさかいたれば、誰の人も早く後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏を深く頼み参らせて、念仏申すべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

この御文章から、人間の命のはかなさを表す言葉が、日常使われる表現として、たくさん日本語化しているように思います。